

アメリカの教育改革と授業研究

報告者 センター客員教授 キャサリン・ルイス

〈キャサリン・ルイス先生の紹介〉

本年度、海外研究員として、キャサリン・ルイス先生（ミルズ・カレッジ）をお招きした。

キャサリン・ルイスは、日本の初等教育のフィールド・ワークを早くから行い、英語圏における日本の教育研究の代表的研究者として、アメリカの研究者が日本の教育を観る視点を影響してきた。初期においては、日本の学校観察を行い、そこにおいて、日本の小学校教育の強さ、例えば、子どもの心も体も頭脳も重視した全人教育（ルイスの*Educating Hearts and Minds*参照）の強さなどに注目し、アメリカにおける人格教育の推奨などにもその研究成果は生かされている。アメリカの学校現場において、教育の改善に向けての実験的研究、カリフォルニア州での現場とのアクション・リサーチ的な関わりを経て、今日、アメリカにおいて注目されている、レッスン・スタディ（lesson study）、授業改善モデルの代表的提唱者となっている。

日本の算数・数学教育は、国際テストの点数の高さを背景に、国際的評価が高い。ルイスは、子どもに考えさせる授業など、多くの研究授業、学校での実践をビデオ化し、指導案作りや教師ワークショップ（校内研究アメリカ版）などを理論的、方法論的に体系化し、アメリカの教師訓練に生かしてきた。

以下に、これに関連し、ルイス氏が学校臨床センター、基礎学力研究開発センター共催で行われた研究会において発表した内容の要約と講演内容である。（文責：恒吉僚子）

講演要旨

- 1) 1980年前後からアメリカの教育研究者たちは日本の教育に注目してきた。とくに1987からの“Child Development Project”というプロジェクトは理想的な学校を追求したところ、その結果が日本の小学校に類似した特徴を持つことを発見し、日本の「授業研究(Lesson Study)」の伝統に関心が寄せられるようになった。また、1999のTIMMSの結果は、日本の学校教育が優秀であることの証明とも認識された。このTIMMSの報告者であったJo Stiglerの唱導もあって、「授業研究」はアメリカ教育界のもっとも大きなトピックとなりつつある。
- 2) いま現在のアメリカの「授業研究」は、日本にくらべればまだ初歩の段階にある。個々の授業に焦点化された指導案のみがクローズアップされる「授業研究」から、単元全体を見通し、具体的な生徒の学習に目を向ける「授業研究」へと転換する動きがはじまったところである。
- 3) 心配なことは、アメリカの教育改革運動の常として、「授業研究」もまた一時的な流行に終わり、その長所が理解されないままに忘れられるのではないかということである。この問題を回避するためにも、実践者を有効に支援できる研究のスタイル・方法論の開発が研

究者に求められている。

質疑応答

現職の先生を中心に、日本の「授業研究」が必ずしもアメリカで理想的に語られているようなものではない現状が報告された。佐藤学先生はこの議論を引き取り、日米の差というよりはむしろ、現場の「授業研究」においてもまた研究者の問題意識においても、日米で求められている教室像は共通していると指摘し、それをどのように構築することができるのかという課題を提案した。

講演内容

「研究は教育改革に役立ってきたか」この質問を見て、自分は反対か賛成かを考えてくださいますか。数字を考えてください。どのぐらいの番号を選びますか。頭の中で1, 2, 3を選んだ人はどのぐらいいらっしゃいますか。あまり役に立っていない（多くの出席者が手を挙げる）。面白いです。研究していらっしゃる先生はみんな手を挙げていますね。反省が素晴らしいです（笑）。4, 5, 6, 7の人？ほとんどですね。8, 9, 10の人？何人ぐらいですか。だれもいないですね。8, 9, 10の人がもしいたら、「どんな研究ですか」と自分の話をやめて聞こうと思っていたのです（笑）。

半分自己紹介をしながら今までの研究の経験話をして、その立場からどのような研究が教育改革に役に立つかを考えたいと思います。三つの経験を少しずつ話します。

まず最初に日本の小学校のエスノグラフィーです。日本の小学校と幼稚園をずっと観察させていただいて、アメリカ人が学ぶべきことがかなりあると思いました。特に今の時期にちょうど日本に来てみると、みんなが日本の小学校教育を変えようとしています。現場の先生も非常に批判されていて自信をなくしている人もいますけれども、アメリカ人の立場から見て、それが非常におかしな現象です。アメリカの中で、多分世界中で、日本の小学校は非常に高く評価をされているのに、日本で評価されていないのは非常に意外でした。

少し例を述べましたけれども、例えば、学びの高次目標という立場から日本とアメリカを比べれば、日本では算数とか理科は非常に素晴らしい授業が行われています。

2番目にお話ししたいことは、「子供発達プロジェクト」。西洋の基礎理論・基礎研究から考えた理想的な学校はどういう学校かというプロジェクトだったのです。20年以上前にできたプロジェクトです。私がおこなった実施組織に入る10年ぐらい前にできたのですけれども、そこに日本の教育を知っている人は1人もいなかったのに、基礎研究から出てきた目標となる小学校は日本の小学校と非常に類似したものでした。それをどのような立場から考えたかという、学習だけの立場ではなくて向社会的な視点から考えました。

例えば、助け合いとかちゃんと責任を持つとか、英語でプロソーシャル (prosocial) と言っている面から理想的な学校はどういう学校か考えたのです。だから、アメリカの小学校はアメリカの基礎理論にあまり合っていないのですが、日本の小学校はアメリカの基礎研究に合っています(笑)。子供発達プロジェクトの重要な原則がここに書いてあります (パワーポイント参照)。

最初はファミリーホームワーク、「家族との宿題」と言っていたのですけれども、宿題という言葉が出るとみんな非常に緊張しますから、ファミリーアクティビティーズに変えたのです。ファミリーアクティビティーズを行いながら自分の価値観とか、子供の内的な動機付けをどのように育てればいいのか、かなり具体的な活動をしながらそれをサポートする教材をいろいろ作りました。

教室の中、または学校行事を見てみますと、例えばアメリカの学校行事だと非常に競争的なものが多いのですけれども、先生方がそれを考え直す機会になります。例えば、今までは理科のプロジェクトが一番できた1人の

子供を優秀としていたのに、そのかたちを変えて自分の学校にサイエンスミュージアム、科学館みたいなのを作って、子供たちがみんな科学館の先生になって親とか妹とか弟とかお姉さんと呼びました。その学校ですべて競争的だったサイエンスフェアには毎年50人ぐらいしか親が来ていなかったのに、サイエンスミュージアム、科学館を行った時は600人ぐらい家族の人が来る。そのような具体的な活動によって、内的な動機付けを考えたのです。

研究も7年間ぐらいずっと行ったのです。擬似実験、つまり実験校とそれに合ったコンパリアンスクール、比較校をずっと見ていました。両者をランダムアサインメントはできなかったのですけれども、ずっと比較してきました。

プログラムの前の1年間と3年間。それで2年ぐらいおいて、プログラムの小学校を出た子供を中学校の時にフォローアップしたのです。ですから、プログラムが終わって2年から5年あとにまた研究を行ったのです。

結果がここに出ていますけれども、12の実験校うちの5校だけが有意にプログラムを実行した。というのは、プログラムがあることさえ知らない、英語で言うブラインドオブザーバーが実験校と比較校に入って、例えば内的動機付けを使っているかどうか、ペア学習を使っているかどうか、プログラムの教材を使っているかどうか競争ではなくて協力をさせるような教え方をしているかどうかとか、いろいろ測って、充分実行していたのは5カ所だけです。

見方によって違うと思うのですけれども、学校文化は3年間でそんなに簡単に換えられるものではないのですから、私の考え方だと12のうちの5はけっこう悪くないと思っています。でも、一般の研究者はそのような見方をおそらくしていないと思います。

ちゃんと有意に実行した五つの学校の中ではいろいろと結果が出ました。論文が出ています。例としていくつか挙げます。内的動機付けとか外的動機付けで何か分かりにくいところありませんか。よろしいですか。

これがグラフです。一番左にある1992年はプログラムが始まる前です。四角いのが実験校で丸いのが比較校です。小学校です。これは習熟度に対する結果です。ここで特に考えていただきたいのは、プログラムが終わった小学校時点では、実行していたどの学校でもアチーブメントテスト、ペーパーテストでは違いが出なかったです。でも、実行していた五つの学校のうちの二つは、たまたまパフォーマンスアセスメントを使っていました。

一つはケンタッキー州で割合よく知られているパ

パフォーマンスアセスメントだと思います。そのパフォーマンスアセスメントは、例えば子供たちにダンブと車を持たせて、いろいろな重りも持たせて、2人に「落ちる速さに影響を与える変数は何ですか」と40分ぐらい時間を与えました。2人でやらなくてはいけないのです。ですからおそらく実験校では、協力することとか今までなかった問題を扱うことは非常にできると思えました。とにかくパフォーマンスアセスメントだけは違いが出たのです。ですからアチーブメントテストだけの立場から言うと、道徳的とか社会的とかそういう効果や動機付けはいろいろあったのですけれども、このプログラムは学習に対して効果はなかったです。

しかし特に考えて大事だと思うのは、実験校に行っていた子供たちは、中学校の時点で成績でも達成テスト、アチーブメントテストでも違いが出ていたことです。それはおそらく前の内的動機付けのグラフと関係があると思います。ですから、自分から進んで勉強をしていたのです。

特に私が面白いと思うのが、小学校の子供は大体同じ中学校に入ったのです。ですから、同じ中学校で同じクラスで学んでいて、それだけ成績が良い。学校が好きだとか、先生を尊敬しているという結果もいろいろ出たのですけれども、中学校に入って全く同じ学校の中の経験です。ですから人間も変わったし、周りに集まってくる人間もけっこうソーシャルネットワークが変わってきているらしいです。

メカニズムですけれども、共同体として学校を経験した子供がやはりいろいろと効果を見せた。共同体意識は何かというと、31項目のアンケートで測ったのですけれども、三つの要素があって一つずつの例です。大体人間関係が温かいところと、自分の声を先生にちゃんと伝えられている、例えばルールはみんなで作るという要素があるのです。お互いの子供を競争相手としてではなくて、協力をする人として見ていたのです。

子供発達プロジェクトから少し振り返って、研究が改革にかかわる役割を考えたいのです。実験校と比較校のデザインを作った時に日本のいろいろな学者に、「それはとても日本でできないデザインだ」と言われたのですけれども、結局、倫理的にも実際にもすごく疑問を感じたのです。これがもし子供にとって一番いい教育だと思えば、それが自然に伝わるのを人工的に止めるのはいろいろ問題があります。止められないし。いろいろな問題があったのです。

一つ一つ実行した学校のケーススタディーをずっとやってきたのですけれども、すごくケーススタディーを

超えた方法が欲しいと思ったのです。いろいろなケースから理論を作る方法を欲しいと思ったのです。というのは、ケーススタディーがあっても、例えば次にそれを実行しようとする学校でそれが役に立つかどうかということ、それは役に立たないかもしれないです。研究者としていろいろな面白いデータを採っていて、それを間に合うように先生方にフィードバックするのは非常に難しかったです。だからその辺も非常に反省したのです。

3番目の所に入るのですけれども、10年前に日本の小学校をずっと観察させていただいて、子供の学校に対する愛着感をテーマにして本を書いていたのです。社会的な発達とか学校に対する愛着感をテーマにしていたのに、どういうわけか急にいろいろなところに「てこ」があるとか「振り子」があるとか気が付いたのです。どうしてかと言いますと、小学校の先生の教え方が非常にうまくて、やはり自分の身の回りのいろいろなところに理科的なものがあるのを気が付いていくのです。40歳ぐらいで、「いろいろなところに理科がある」と初めて気が付く鈍感な人間だったのですけれども、本当にそれが私にとって素晴らしい経験でした。算数も同じだったのですけれども、いろいろな先生に「その理科の教え方、どこで習ったのか」と聞いたら、「研究授業」といろいろな先生が言うから、その研究授業を見たいと思ってそこから研究授業を見始めたのです。

アメリカのNSF、全米科学基金からファンドを得て、日本のいろいろな小学校で理科の研究授業を観察させていただいて、それをアメリカで発表したのですけれども、アメリカ人は、大体「それはとてもいい制度ですけれども、アメリカではできない」という反応でした。1999年、4年前に非常に大きな現象がありました。「TIMSS」が行われて、その結果アメリカの算数、数学、理科は非常に弱いという結果が出たのですけれども、結果と一緒に…。たまたま結果を出した人がジム・スティグラで、吉田誠さんと言う人が書いた研究授業に対する博士論文を読んでいた人で、日本の教え方があれだけ洗練されたいい教え方というのは、おそらく授業研究のせいではないかと説を出したのです。それでだいたいアメリカの中の環境が変わったのです。「授業研究はやはり真剣に考えなくては」と思う先生が非常に多く出たのです。

「アクションセオリー」。授業研究がどのようなものか、どのような道で影響を与えているかを、理論を立てて洗練していく研究が大事です。

具体的な例としては、日本だと研究授業を見ていると、先生方が丁寧にみんなノートを取っているのです。アメリカの研究授業を見ると、ノートの取り方を今まで教

わっていないから知らないです。ですから日本のノート
の取り方の具体的な例を、いろいろとアメリカに持って
いくと、先生がそれによって先生のノートの取り方も非
常に変わってくる。

今でも2週間、日本に15人ぐらいのアメリカの現場の
教師が来ていて、日本の研究授業をいろいろと回って見
ていて、ノートの取り方とか、協議会のアジェンダとか
を勉強して帰ります。

アクションセオリーですけれども、私は間違っている
と思う最初の考え方を、今でも多くのアメリカ人がして
いると思います。ですから、指導案を何回も書くこと
によって授業が良くなるという考え方だと思います。現場
の先生方もいらっしゃると思いますから、授業研究がど
うして授業に影響を与えるかという理論を、この辺はぜ
ひ批判してください。